

人をつくる、まちをつくる、文化芸術。

熊本市長 大西一史 × 熊本市文化顧問 日比野克彦

SNSの普及に加え、熊本地震の発生、新型コロナウイルス感染症の拡大などにより、世の中は大きく変わり、人と人のつながり方も変化しています。そんな変動する時代の人づくり、まちづくりの軸になるのが「文化芸術」。熊本市では新しく「文化芸術推進基本計画」を策定し、アート(文化芸術)の力をいかした上質な生活文化都市づくりを進めています。新計画に込められた想いを、大西市長と日比野文化顧問が熱く語り合いました。

●文化芸術のもつチカラについて

(大西市長)

時代・社会の変化があり、今までのつながりや組織、考え方などが行き詰まってきていると感じています。SNSなどにより情報がオープンになって、つながり方という意味では、いびつな感じがあると思っています。まちづくりの上では、人と人とが共感し合いながらつながっていくことが、すごく大事なので、アートの力を取り入れることによって、全く今までとは違うアプローチで、人・まち・地域のつながりができていき、これまでなかなか解決できなかったことが、アートが刺激になったり、つなぎ役になったりして、さまざまな解決の新しいアプローチにつながっていくのではないかと考えています。アートの力をこれから計画にもいかし、広げていきます。



(日比野文化顧問)

今日、市役所の皆さんとDOOR研修(※本計画P34)をやりました。20人の受講者に「自分の思い出のある洋服を持ってきてください」と呼びかけると、初めてお見合いした時に買ったスーツとか、高校生の時に授業で仕立てた和服とか、自分がカンボジアに行った時の地雷除去の人たちのTシャツとか、いろんな思い出の洋服が出てきて、素敵な展覧会になりました。さっきまで自分の家のたんすの中にあっただけのもの

が、みんなでその思い出を共有して、展示ケースの中に入ると、表現された作品に見えてきます。その見えてくるっていう力は、物の力というより、人間の中の力、想像力なので、そのスイッチを押すということが、アートの力だろうなと思っています。自分たちの日常が急に価値化される。100円はいつまでたっても100円だけど、アートの力が加わるとポロポロのTシャツがすごく価値があるものに見えてくる。その転換は、アートが得意なところなんです。これから多様な社会を築く上では、一定な価値ではなく変容する価値が共存しているということが、豊かな彩りのある風景につながっていくと思いますね。

(大西市長)

そこなんですよ。多様な価値観が共存している状態というのが、私が目指している上質な生活都市。多様な価値観をみんなが認め合い、皆さんの気持ちや生活が満足なものになっていく、アートを入れることによって、もっとみんなフランクに、自由に、アクセスできるようになる。ここが、アートの大きいところだと思いますね。

●アートを処方する「文化的処方」

(日比野文化顧問)

今、いろんな美術館でアートコミュニケーターを育成しています。アートコミュニケーターとは、美術館の学芸員のような専門知識を持つ人ではなく、一緒にワークショップをしたりして、一般の人たちに美術館の展示をより楽しく見せる役割を持っています。熊本でも最初にアートコミュニケーターを作ろうと思いましたが、熊本にはすでにアートコミュニケーター的な人々がいるんですよ。2006年に展覧会をした時に、下通・上通に文化を愛する人たち、市民と共に音楽をする人たちもいました。だから、熊本には、すでに文化的処方を行ってる人たちがたくさんいるので、そ

アートには、 人をつなげる、 まちをつなげるチカラがある

大西
一史



の人たちに、自分たちのやっている行為がとても価値あることなんだと評価し、価値化する。そして、その活動を継続的にそういうものを全部つなげていくと、まち中がミュージアム、文化的処方フィールドとなる。熊本市だからこそ、きっとできるんだろうなと思っています。

(大西市長)

熊本は、例えば九州の中でもファッションの先進地で、熊本の人たちは皆さんオシャレだと言われることが多いです。文化的処方を実践する人たちがもうすでにいる。だから、それを新しく発掘しながら、つないでいきながら、また新たに文化を発信する人たちが生まれてくると最高ですよ。

(日比野文化顧問)

熊本市の区役所とまちづくりセンター^(※)、それらは文化的処方の拠点であり、実践の場です。地域住民の特性と地域の場の力をつなげていって、その地域ならではのアクションを起こしていくことが魅力になり、市民にとって文化が身近なものであり、自身の日々の生活に役に立っているものなんだということも実感できるのかなと思います。

(大西市長)

まちづくりセンターをつくった時に、地域担当職員^(※)にもっと市民の中に飛び込んで、と言いました。市役所というのが非常に固くて近寄りがなくて、せっかくだかいいことをたくさんやっているのに理解されていない、もっと飛び込んでいけば、同じことをやってもすごく評価されると思ったんですよ。地域の人たちもそこに共感をして、そして新しいまちづくりが生まれ始めて、みなさんの市役所に対する見方が変わりました。今すごく職員を褒めていただいています。お互いが見えるような関係を築く時にアートがあると近づきやすくなる、多分そんなことじゃないかと思っています。ファッションを1つ取ってみても、会話が広がるで

しょう。

例えば音楽でいうと、私も目覚めの1曲を投稿していますが、SNSで話が広がったり、つながりが膨らんだりするからいいんですよ。アートというのはそういう作用があり、心を柔らかくすると思うんですよ。熊本地震の時がそうだったと思います。あれだけみんなが絶望のどん底に打ちのめされて、家も会社も地域もめちゃくちゃで、みんなが混沌としながらもなんとかやり過ごしていくしかない、そんな不安な状態の時に、みんなはつながりを求めたんです。そしてみんなが協力をし合ったということがありました。私自身はここで指揮をとっていたので、音楽を聞く余裕もなかった。だけど、誰の発案か分からないんですが、熊本シティFMが各学校の校歌を流したんです。みんなが避難所として学校に集まっていたので、それがものすごく受け入れられて、みんなで頑張ろうというような形になっていったと聞きました。

(日比野文化顧問)

阪神淡路大震災の時に、友達が神戸にいて、「まちが焼けて色が無いから、うちの喫茶店の看板を描いてくれ」と言われたので、みんな食料とか水とか持って行く中、僕はバックに絵の具を詰めて行ったんです。オレンジと水色で看板を描いて掲げたら、みんなが「色あるといいね」と言って、コーヒーで一服して、またちょっと行ってくるわってというボランティアの人たちが何人かいて。音楽しかり、色しかり、力が湧いてくるっていうのがありますよね。

(※)

平成29年度に地域支援の拠点施設としたまちづくりセンターを設置し、まちづくり支援専任の地域担当職員を配置している。地域担当職員は、相談窓口・地域情報の収集と行政情報の発信・地域コミュニティ活動の支援を行っている。

人間の中の チカラを引っ張り出す、 それがアート



プロフィール

1958年、岐阜県生まれ。地域の特性を生かした市民参画型の芸術活動に全国で取り組む。熊本においては2007年、まち・市民と連携し作り上げた展覧会「現代美術館開館5周年・熊本城築城400年記念日比野克彦 HIGO BY HIBINO展」を開催。2021年6月、熊本市現代美術館館長就任。2022年4月、東京藝術大学学長就任。2023年4月、熊本市文化顧問就任。市民が身近に文化芸術に親しめるまちづくりのために、職員研修の実施や、市の政策にアート思考で助言をするなど文化と行政、まちづくりのつなぎ役を担う。

(大西市長)

アートが心にポジティブに作用することで、「頑張ろう」と思えるようになると思うんですよ。そういう文化的な処方方が、人に勇気を与えていると考えています。皆さんもそうだと思いますが、自分のテーマソングとかありませんか。ちょっと気合い入れていこうっていう時とか落ち込んだ時はこれ聞こうとかね。音楽だけでなく、そういった理屈ではない感覚を呼び覚ますアートっていうのが、殺伐としたこの人間関係とか社会をほぐしていく、そのことによって社会がポジティブに変わっていくと思います。

●「人をつくる、まちをつくる、文化芸術」 について

(日比野文化顧問)

文部科学省が今、部活を地域に移行しようとしています。僕も本来、図工にもそんな形があってもよいと思うんですよ。学校はクラスには同じ年しかないけど、地域に行くと様々な年齢や障がい者、外国人など、いろんな人がいる。その中のほうが自分の個性はわかりやすいので、きっと自分で自身の価値を見出すことができる。自分らしさっていうアイデンティティを持った上で社会に参画していくと、多様な社会の基本的な考え方ができる。アート、文化の感性、その特性を体験できるまち、環境を作っていかなきゃいけないと思います。

(大西市長)

20年ぐらい前に描かれた南部まちづくりセンターのウォールアートの劣化が進んでしまったので、管内の2つの校区の青少年健全育成協議会の人たちがこどもたちと一緒に、もう1回みんなで描き直しました。その時に熊本大学の美術の先生もいらっちゃって、その学生さんたちも入ったり、美術部の生徒が入ったり、そして地域の団体などから

の援助でペンキや刷毛等を購入したりと、協力をしながら完成させました。その時に、自治会長さんたちが、「校区とか関係なく、一緒にすればいいと思った」とおっしゃっていたのを聞いて、こうやってアートが地域を融合していくんだ、これがまちづくりの神髄だと思いました。そこに協力したり共感したり、人がまたそこで新しく知り合っていますから、さらに広がりが出てきます。地域のコミュニティで人と知り合って理解し合えた時に得ることができる喜びや、あの場面を広げていくと、熊本は温かいまちになるなと思っているんですよ。

(日比野文化顧問)

それが同時に人づくりにもなりますよね。

(大西市長)

このように、小学生とか中学生の美術部などの興味ある人たちにどんどんそこで教えていくわけでしょ。大学生も入り、まさに異年齢集団がそこで文化芸術を介してつながっているの、そういうことが1つでも多くできるいいなと思っていますし、そういうきっかけを作るのが人づくり、まちづくりにおいても必要だと思います。

